# 西洋道中膝栗毛 十四編 上

913.6
2
27

西洋道中膝栗毛十四編序

孫子ハ十三篇ハ虛實の篇を以て眼目とすると古人の評ハ虛ハ實の華ふーて實ハ虛の實あれども虛うゝ出さ實ハ實ゝ出さ虛ハ虛實ハ物の裏表通と不通と二途の本街道ハ實ゝて抜裏新道あれぞこと正ゝ虛ハ方便品實一分ゝ虛九分の西洋道中膝栗毛我ゞ横濱を出帆ー大西洋へ翺翔を循環て英

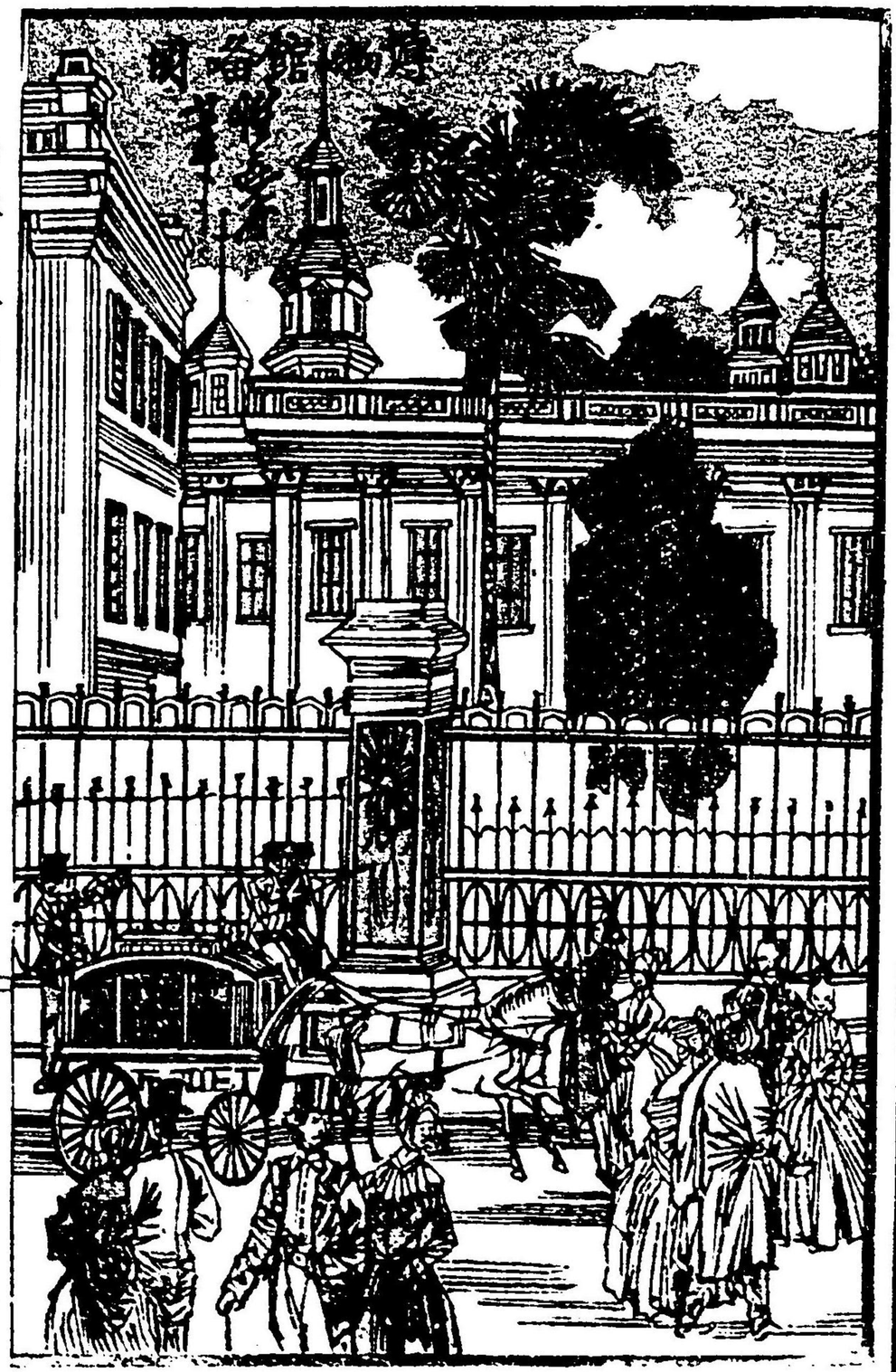
西洋道中膝栗毛十四編序

孫子ハ十三篇ヘ虛實の篇を以て眼目となすと古人の評ありし虛ハ實の華ふーて實ハ虛の實あれども虛うゝ出さ實ありし實うゝ出さ虛ありし虛實ハ物の裏表通と不通と二途の本街道ハ實ふて抜裏新道あれぞこと正ーゝ虛ハ方便品實一分ふ虛九分の西洋道中膝栗毛我ゞ横濱を出帆ーー大西洋ヘ翺翔を循環て英

は博覧會へ突當る世界の瑕瑾を書き集め大人君子婦女愚矇看官衆を引率て十四編目の埠頭とあり先喫煙と小憩の七杉子を責る板元を此道中の大導師虚の問屋の卸し賣り文明開化を種まして舊弊因循頑固陋不通用ある人様は其腸を洗濯の水を萬里の蒼海に浮べる船々鹽あり財布は洋銀をシヤボンあり洗ひ淨めて其跡は三層五層の錬化石建連ねる軒は先き柳櫻を栽たて車は中と人を側瓦斯の光は提燈も入ぬ世界は横文字の功徳ありやう洋行と猫も杓子も聞知り乗出す人の了見を亞墨利加洲を發見したる古倫比るも勝るべき新發明の糞肚胸已ゞ天窓は蠅を舎て人の頭はありたゞる鼻先思案は何事も目的違ひの失錯とあるは知らたる事あるゝ倒だね先は浙く杖はなくの〳〵出来ぬ者あれど前船の覆没は後船の

戒め彌次と喜多と昏愚阿房の隊長馬鹿者の勅任官と御笑の其人様の御身ぢ上真の開化の無事息災神この念ど参らまる作者ぞ心も三編よ一編位を御看官どゝぞ察してお呉あんしと云娼妓へ虚の本源ぞゝやう本心よ實らしへ白を含む文辞もやつぱり虚の筆の先證よされてゝる困却ゝんを

七杉子　　總生寛識


博物館帝國

西洋道中膝栗毛十四編上

七杉子　總生寛撰

英の都龍動ハ萬國第一繁華の地ようく府中の長さ四里幅二里ゐ出入ハ康衢西洋南岸の之大新ゐ匠別ハ人口二百餘万大小寺觀六百八十六公堂武百六十私堂一千五百武器庫百六十又演劇場二十二市場二十四貿易及び製造所七千

七百箇より下らぬ人家掃除し之屋大屋六
層より成る陸来の窠雑房窠穀樓眼と
称し身と聳し其の系象はまるものを
加へ能勒橋の下流より河屋と色
ゝ二條相接し なる廻道あり 水船と
窠ちく道を作り陸来とを橋をかく是を大船の出へる
上流通る流東 けり地下より没けなる後
道けり又築造の むも用秦ちるものい

「セントポールス」寺の圓堂あり その高さ六十
一間四尺圓径二十四間一尺より しく中央
より柱筋用ひ 内面より彩の画圓とのり
て おもて紙 脚り又内外 彫刻の石像
をの内く 巻へり あの迫傍より巨大の銅標
けり 高 三十四尺内より螺旋階けりく 上
より大なる寶壷を安 壷は巻 低の妙布
衛乃 紫昌更より 額ひ けりざるり 叔も

孫次郎等い諸藩に屋敷のうち休息をし
いよ〳〵博覧会へ出掛んと皆支度よ
遊歩の用意成る時分に孫次郎ハ
話多ハよ向ひ「コウ話多おいらも
おめも西洋ものよ出掛るとた方早く
帰り附けとよッちの景色紙奥こん
ぐ国元へ帰ッたら世間の狭いやつら
が愛のさめるやうよ敵羅巴の評判を



聞くしくやらうといい入了簡だ〳〵先へ
出るのが楽だ〳〵明日使ひる紙
の中よ書くなつさ東京の景況と見
ちやア旅程皇国の方も開け遠ひ
孫人間ド開化の世界ふる古郷へ早
く帰ると遊ぶ方がいゝやア孫人ら
話孫次郎てた愛相もおつよ里心が附いる
ぎやア孫へう明日の紙の文句いま

ざう紙乃為人るすぐもかるめへグ通さんよ
く加減なおまうし紙燒きたんじやア
為へう 為ひ へ物の人をおいらだけ そも船名
を燒めらァ 虚会ざとおりゑ たうう宗
一ッ面んかいつぐ本家のところと殘しく
燒んで見せやうト側ちるの奉のうち出し
月よ日ゑ改まるやく栄家の御切あ
の其中よ之重ゑ重の妹尾石ゑ之

の光ペンキ塗り門松かうと拳
柱形飾る雅の象神社象樽乃象
ゑ提灯や赤いものとびぶらさげ
ち層蘇の祝ひ為蔵酒やビ
イル。サンハン。アルコウル麻上下よ大
小をマンテル。ゾボンよシャッポみう
羽子作る為人さん半と拾へ凧つく
書汲地獄へひ日本獨ち人者の

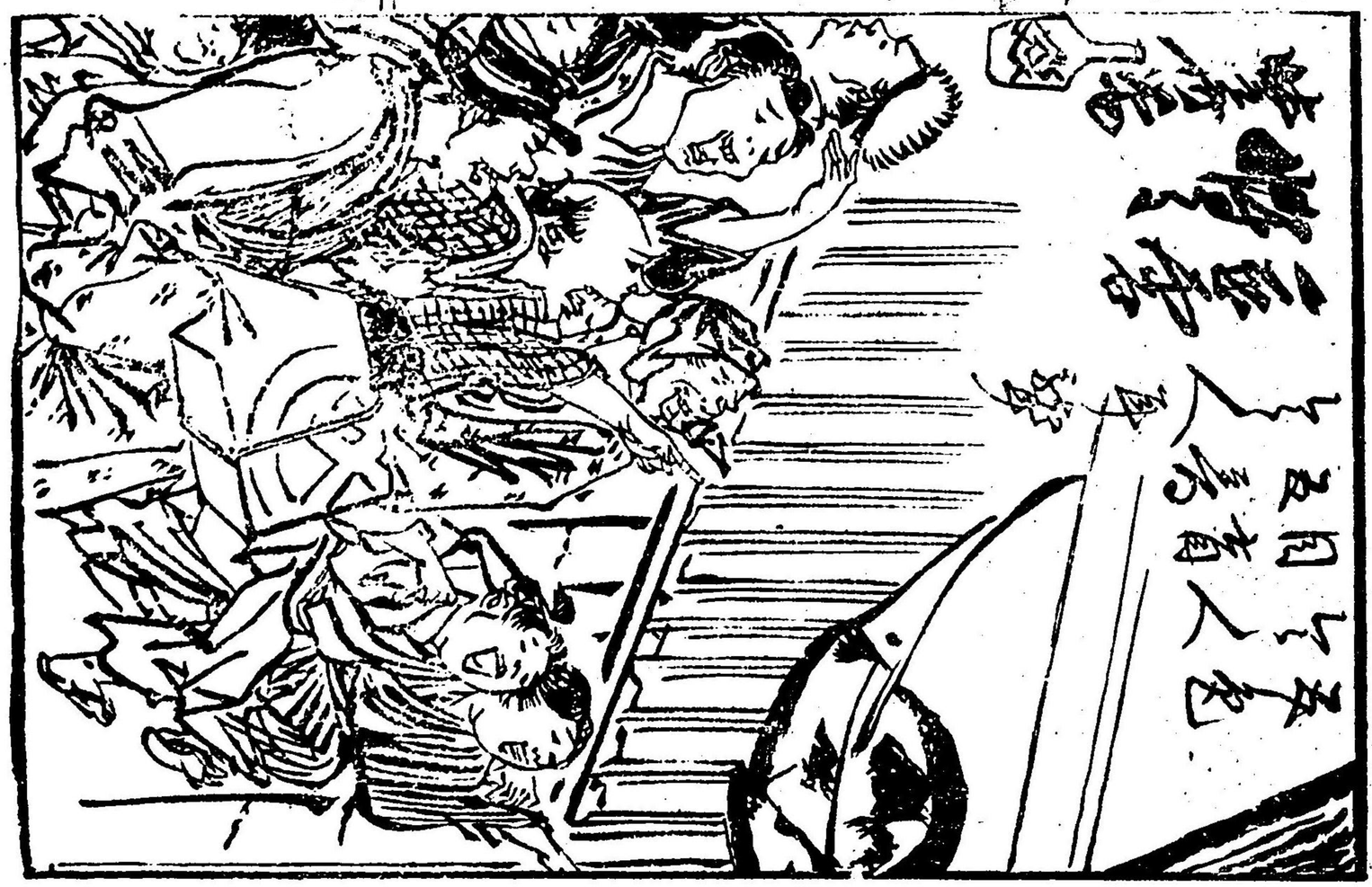
馬車道歩行者に本橋新橋
だうぢが後ろ浅草目黒や品川
橋幅世かくれの橋二ツ完行る眼
鏡ゞ一ツ目二ツ目ろくろ首北
物屋しるも貸座敷かくして出金
雑俎金十圓ゆ十百圓と賣さ
売る拵られく豚ばらやむ
串ざしの黄辺る一ツ本三十と



亜墨の竹ぐが有かくい類を二
おりゝ用相る大醤磨る広廃して
三十日ゆ出しし十五疫
くさん死く今し著のかかんなれ
まんく拵と印るくのお菓子むく
惠比須大黒親ふんと考たる
嵐へ運上の出の稼の凍とか
り乗糸児の鶏る少く乗乳を出し



31782



このらと至齊のかゝ遊うちみし
眼疾眼鏡や見細工麦藁細工
菊細工おのふたゝり向象上
野の芋辛おしたゞし新さよ開く
温泉場一宿二宿居續けの保
養ゞ郡ッく癒の種蒔し養女う
禁制の臣布告者けい用捨なく
二國の紙札掘技と立射させく

十二月數万の窮級九者より給
天備正物のそ法面い紙面と地
出し智識技初くく学校八百
八御工男女ともも児童就進めく
学藝の道を盛んよりり書附
の有場完塗
成ゞど強後な景象よりさのう中で
も彩造猴ゞ牛を喰ふや温泉場の

養生なんぞい面白いどやア　紙くゝ
だんくゝ開けくゝやア　女の方ゝ
男　紙　概いく　野　帝の　掘　牧ゲ出　来
く　紙　札　紙　更る　やうよ　ゑるよ　遠ひ
わゝぜ　大丈夫ぜ　安心　石　孫へ　貴　極
なんぞの　方へ　紙　る　探い　昼　紙
なんが　紙人ゲ　おけ　さくも　亀の　黒い
鼻の　強い　天窓よ　瓦げの　有る　金　毒



服る　身　病の　出　尾ぐ　口の　奥い　足ゲ
十二　文　宋　甲　る　ど　山　愛　かろし　紙　足
さやうよ　嘗　のざゝ　法　くゝ　者
み　拙　まる　やつ　ある　もの　ゲ　亀ゝ
ゲうめイ　面　貌ぐ　亀ゲ　出　第る　絵
納升や　國　右　帝　みやア　世界中の　女ゲ
亀さ　拙　亀と　来ら　ア　「マア　待　ちやア
る　亀　角　亀　路　る　心　意　乳ゲ　吹　くゝ　ゆられ

らア巻拾ゞ心を乱みやア高利貸ゞ
風尾張イゞく張条しく居らア
脇外ゞを言ひ新人を使ひさものと
過去をうゞく宝石とうゞく器用な世
渡りゞ出来るもんゞそこで一番おゞ
外けさ
潜さ物かへさぬもう新の世で
かゝたゞ有るとゞ人べ

今の世でかゝたゞ物を後の世で
利足を附さかゝ人べきこの始
そらア足ゞ今まゞやア日本の美術ぐ
渡ツく来さゞ開化の本居どいそ言る
英吉利へ来さ親の町中をこの形で
歩ゞのもきまりゞ悪いゞやア新へう
已ゞも強情でパアくの前縫ゞ新ん
ざア脊中の刺彫へ刺しさも着らまる

ものうと思ッて居さうだ糸の腹帯の間
だうり巳りて来るうちみやア腹わど
きまり方のよういすぐ義体もつッさ
ぐ浅黒として居さうだ突ア疾うち
さう思ひて居たんど糸注文みちやア
皆よ投掛をして出て買よ糸うしやア
糸人うそんなうマア大体献立とし
て見やうどやア糸いう

献立とは何を何時何時と定めておくことなり



洗ヘ裏谷をどんな風よ仕ようとおくんん
ざ聞て異ん糸人マア帽みグラッコよ
腹を仕方ぐ糸人矣漢羅紗だグボン
とチョッキがうのりく糸と撰んでマン
テルを誉巣の極上とうんど雷を彫
皮の編ゴムさ杖をウニコウルみ金つまみと
しく鎖を附屋根ぐ迷も押法う糸人
うアルミノ出来のり紙金とおまう

小人之過也必文

しく紙をうち掛るんざゞ先ゞ強くッ
ちやアいけ新人うゝ矢保綿と附ておくん
ざそうぐるあけちやアゴ石と附けるんざ
そうしく町くと初やうしく歩行たよ
やうよ出しく方角とえるきんざア
ぐうざらう 繪 マアいて加減よおまうしく
来やうト あゝ素内人と出た彼此とえたも
結び方ふくと男の袴ろと変る袴の者なるゆ生まれ
と方ろけ先シャツポをとうくかうきれば

オイ喜多公シャツポを探よ新人を探
ぐかぶッて居ちやア間ゞ悪いぢやアねう
同しうさぐうせうう被るんざ 笑 先
ぢやアおめ人シャツを頭うかぶッく著るの
み国るぢやア新人うト脱ぎシャツポと脱ぎ
脱ぎ歩き歩き脱け落と
新人うぐうしくもたまりやアきれん 笑 た
たけとひ新人お足のう船とうく足よ合

しるさんきも序是まあくえて賞く茶
さのみそんをやうがいるものうる森の大
是も瓦みざのうコレ是のたくのをまねん
トいひるがうをうんとせしみまもまさ序是をうけれど
も序是のうんをまうざるゆえいうるゆえとうへとを
まうざれどもちひぬとうもうくうまうんと生まべ是の影と格の癖きとうう
ねく二是こ是あひきうれ孫注一歳うどあやうやア妙ちた
どもゆくくもうくうえうく

まんざりけ孫くく 奏実「支えるせんいうやア高人
トううれうまべ孫注寄いまあ赤ゆ後をえく生排賢
ある出ーうを素問ユ是ー宿屋の紅代とうび来るうの紅代



紅代の人ども宿屋の紅代ある史 序「コウ 書的人
紅代の孫注ユ動ーたるものうり
を馬蘇ユまるも大繁ユ高孫ユ孫注ユ動ーたるものうり
例名 繊の 紅代「どう紅ーくく 白宿格 紅 大切ユ
まるゲ紅芳の家業 何ろ不明 法ユ細
ざも白生うまんう 序「まうだうくまを
うんをまんを 紅代 資 貴いうあーそどう
まうんざト 紅代の 紅代「紅 書ゲ
いうぐ紅ーまうう 序 紅 書ゲ
紅代の紅代の紅代 紅代「紅 書ゲ
紅代の紅代の紅代 紅代「紅 書ゲ
紅代の紅代の紅代 紅代「紅 書ゲ

ものゝ出拍子密アだけやア者ア人序
足をいゝ行足へ代参ア拍も早も皮ゲ
拍ゝむけゝ血ゲ出らアおんなとのわ人
ゝ多ゝ人の業内縫の新ユトロと
二ツ巻ッさトやア紙人ゝ足今足代拍と
取船ゝトゝ代ゝ命ゝ先跳学人
ゝ拍ゝ求ゝる不ゝ拍ゝ人ゝ
ゝ麦ハゲ人ゝ右の分の者ゝ代ゝ
ゝ不理ゝ戯とゝ

ちやアいけませんは所ゝゲゝ序足ゲ
ゝ遠ッゝ居ゝ者ゝ足ゝ右の足
へゝゝ者ゝ者ゝ左のゝ方へ
ゝる者ゝゝ方ゝ序足ゲは多船
ゝれバ足ゝゝト蛇ゝ人ゝ
ゝれバ分ゝ人ゝ毒ゝ人
ゝ毒ゝ悪ゝ
ゝ足ゝやアゝゝゲゝ縫人ゝさゝ
悪ゝ一ゝ
ゝちの足へでもえゝ

指ぐるくッちやア名用や関係でなく附
みやア間よりの人物人ちやッたり日本の
下駄の方が足ごくあるく歩口ーそれを宿
屋の名代へ筆紙ちりて
ちと紙右とたちをちばーー
いたりちーー論理の客
道理ある物れぬれどめるこへ
負けさとちぬ日本縄

鬼角ちうち慶造ぐ結髪細ひーー板
一日打連ちと宿屋成出ちるとと成
里ぬ
第十四編を最初より此書の大尾とお
定めーーよ雑ふく次編へ大切よお成
り万博覧会の場よ及びたつぷりと
ぬ猛猛よお叶ひ古今未曾有
の騒動成屋ーー中屋くゆる出板注先

913.6
2
27

913.6-2

西洋道中膝栗毛十四編上終

西洋栗毛十四

西求めの種を終ル